

新 刊 紹 介

1. 光明皇后御傳 改訂増補版 宗教法人光明宗法華寺編
2. 細川勝元文書集 (1)
(戦国史研究会史料集 8) 浜口誠至編
府中市編
3. 新府中市史 近世 資料編 上
4. 明治の和紙を変えた技術と人々
——高知県・吉井源太の活動と交流—— 村上弥生著
5. イスラーム・ガラス 真道洋子著 榊屋友子監修
6. 創造された「故郷」
——ケーニヒスベルクからカーリーニングラードへ——
ユーリー・コスチャショーフ著 橋本伸也・立石洋子訳

新 刊 紹 介

宗教法人光明宗法華寺編

『光明皇后御傳 改訂増補版』

吉川弘文館 二〇二〇・一〇刊
A5 三〇〇頁 六六〇〇円

光明皇后は一般的にも知名度が高く、その伝記としては、林陸朗『光明皇后』（人物叢書）（吉川弘文館、一九六一年）がある。光明皇后の動向は政治的なものだけにとどまらず多岐にわたっており、その分析は奈良時代の政治・社会だけでなく、仏教史を理解する上でも、必要不可欠な作業と言える。

本書は、光明皇后の事績をより深く理解するため、法華寺がゆかりの史資料を蒐集し、編年順に編集したものである。『光明皇后御傳』（初版本）は一九五三年に刊行されたが、今回は詳細な注釈書である新日本古典文学大系『続日本紀』が岩波書店から刊行され、研究が大きく進展したことが影響しているのだろうか、『続日本紀』を中心に付されていた頭書・脚注を削除して形式を一新しており、それに加えて改訂増補を施している。特に木簡などの新出資料を

一〇六（一〇七）

増補したことへの価値は大きい。米田雄介氏の監修によって出版に至った本書は初版本に引き続き、奈良時代の基本史料である『続日本紀』だけでなく、説話も含めて幅広く史料を採録した点に特色があり、研究者のみならず、初学者にも薦めたい一書である。

光明皇后について、皇后時代の動向は意外と不明な点が多い。それに対して、皇太后時代には皇太子道祖王の廢太子、橘奈良麻呂の変取束に向けた斡旋、淳仁天皇の父母（舍人親王・当麻山背）らへの尊号進呈への関与など、奈良時代政治史を考える上でキーパーソンのような動きを見せている。こうした点は改めて本書の通覧から確認できるのであるが、説話などもあわせて記載されているため、後世における「光明皇后観」が垣間見えることは興味深い。

例えば、天平十二年（七四〇）八月に玄昉・吉備真備の排斥要求に起因する藤原広嗣の乱が勃発したが、関連する史料として挙げられている『源平盛衰記』卷三十一「広嗣并玄昉僧正事」や『今昔物語集』卷十一・第六では、光明子と玄昉の怪しげな関

係が描写されている。玄昉は、聖武天皇の出産以後一度も我が子に会ったことがなかったという皇太夫人・藤原宮子を看病したことが「続日本紀」に記されており、こうした事実が曲解されて、光明皇后との不適切な関係という言説を生み出したのであろう。これは「湯屋皇后」伝説といった、後世の「光明皇后観」を考える上でも重要な問題である。

また、先述の通り、本書は木簡などの新出資料を増補していることが特筆される。皇后宮から大仏鑄造のための銅を支出したことを示す東大寺大仏殿廻廊西地区出土木簡はその一つであり、「続日本紀」の崩伝にみえる大仏造営への関与がここに裏付けられる。

ただ、光明皇后関係の木簡を採録する場合、二条大路木簡を捨象することはできない。二条大路木簡は光明皇后関係だけでなく、藤原麻呂の家政機関に関わる木簡が混合しているが、皇后宮警備に関わる木簡も多く出土しており、これらの一部だけでも採録してもらいたかった。加えて、宮町遺跡出土木簡には「山背国司解解宮」「皇后

宮職」などの記載がある習書木簡もあり、これも天平年間の光明皇后の動向を知る上では、貴重な木簡である。

しかし、これらの木簡が採録されていないくても、本書が学界に寄与する貴重な一書であるという評価は全く揺らぐことはない。ぜひ多くの方に手にとっていただきたいと思う。

(上村正裕)

浜口誠至編

『細川勝元文書集(1)』

(戦国史研究会史料集 8)

戦国史研究会 二〇二〇・四刊
A5 一三四頁 一五〇〇円

本書は戦国史研究会史料集の第八冊であり、一五世紀の室町幕府の重要人物である細川勝元の受発給文書を集成した初の史料集となる。第一巻は、嘉吉三年(一四四三)から寛正元年(一四六〇)までの三七七通を収める。それ以降および年未詳文書は第二巻となる。

冒頭に編者浜口誠至氏による「はしが

き」と「凡例」が記されており、勝元文書の概要と編集方針が示される。歴代最長の管領在職期間や戦乱への関与から、勝元の文書はかなり多く残されている。さらに、管領や守護、地域権力との取次役など、様々な役割を果たしたため、管領奉書・施行状・遵行状・書状など、多様な文書が列島各地に発給されている。本書により、前半生の文書をおおよそ一覧できる。影写本・写真帳も活用して正文・写・案文の別を付し、堅紙・切紙など形態についても注記する。同文の写・案文の存在も明記している(一七二号、一七九号)。

浜口氏も述べるように、勝元は様々な役割を担い多様な文書を発給した。そのため、勝元文書一通だけで完結するのではなく、御内書や遵行状、被官の書状など複数の文書が組み合わさって機能する場合も多い。よって、本書は他の史料集・データベースとともに利用して、真価を発揮するといえる。特に同シリーズの木下聡編『足利義政発給文書(1)(2)』(二〇一五・二〇一六)は時期が重なっている。本書との併用が有効である。

さしあたり現時点で気がついた点を述べておく。まず、「勸修寺文書」を典拠とする長祿二年(一四五八)四月二十九日管領奉書写(二七三三)について、「川崎市市民ミュージアム所蔵 古筆手鑑坡香殿」(淡交社、一九九九)二八四号は、勝元の花押を欠き、宛所を切断されているが、当該文書と同文であり写とみられる。加えて、安田弘仁「翻刻『勸修寺別当長吏補任等古記録』下」(『勸修寺論叢』三・四、二〇〇七)に写が引用される。これらの写にも言及が必要となる。

次に、同年四月二〇日施行状(二七九号)の宛所「細川阿波守」を、細川持久に比定する。しかし、岡田謙一「統源院殿春臺常繁小考」(『ヒストリア』一六七、一九九九)が明らかにしたとおり、この時期の細川阿波守は頼久であり持久ではない。さらに、六月一四日湯河政春宛細川勝元書状(三四三三)を、封紙の異筆の記載に従い長祿三年に比定する。だが、すでに弓倉弘年『中世後期畿内近国守護の研究』(清文堂出版、二〇〇六)が、関連史料と同時期の状況から、応仁元年(一四六七)に比定し直

している。以上の文書については、先学の成果を踏まえて比定を改める必要がある。なお項末だが、三四九号の注記で「施行状の署判は」とするのは「施行状の書止は」の誤りだろう。

広範な分野に寄与する労作であり、安価での刊行も特筆される。浜口氏および刊行元の戦国史研究会に敬意を表し、紹介を終えたい。

(川口成人)

府中市編

『新府中市史 近世 資料編 上』

府中市 二〇二〇・三刊
B5 五九九頁 二〇〇〇円

東京都府中市では平成二十六年以来市史編纂事業が進行中であるが、この度近世を取り扱う巻の一冊目として、資料編上巻が刊行された。

近世資料編は上下巻構成の予定であり、上巻で府中宿(本町・番場・新宿)を中心とする史料、下巻でそれ以外の市域全体に関する史料を掲載する方針が示されている。

よって今回刊行された上巻は甲州街道の宿場町としての府中のあり方に焦点をあてた史料集といえる。以下で紹介するように、史料は大きく四つのテーマに分かれて収録されている。

第一章「家康の入国と府中」は近世前期を中心に、府中における知行・領主の様相を知ることのできる史料を取り上げる。特に、豊臣秀吉によって建設され、正保三年(二六四六)に焼失した府中御殿については独立した節が立てられ、地誌・著作類も含めて幅広く関連史料が収録されている。

第二章「府中宿と伝馬役」は府中市域の村々および府中宿の郷帳・明細書、宿内の反別・組高の書上といった基礎的な史料や、府中宿に課せられた諸役のあり方に関する史料で構成される。伝馬・助郷、問屋・本陣、中馬出入といった節が設けられており、特に中馬出入関連史料からは内藤新宿・八王子宿といった他の宿場町との利害対立について知ることができる。

第三章「宿場の暮らしと諸商売」は府中宿の人々の生活の視点から、土地利用・年貢・宿役人・人別・諸商売・旅籠屋・災害

などに関する史料を収録する。諸商売に関する史料からは、幅広い業種の存在のみならず、周辺の村々とのつながりや相場の状況についても窺うことができる。また、府中宿で起こった主要な事件にまつわる史料も掲載されており、具体的な事例を通じて府中宿の人々の暮らしぶりを垣間見ることができる。

第四章「府中宿と馬」は近世の府中において特徴的といえる、馬にまつわる事柄を取り上げる。具体的には府中宿で開催された馬市、六所宮（現在の大神神社）境内に存在した馬場、「馬医」の役職を拝して府中に居住した幕府御家人下家に関する史料で構成される。馬市・馬場は徳川家康に結びつく由緒を有しており、府中宿での商売や六所宮の権威強化に影響を与えていたことが分かる点が興味深い。

既存の府中市関係史料集との重複が極力避けられており、府中宿を中心とする府中市域に関する理解をより深める上で新たな材料を数多く提供している。また、「史料で学ぶ府中の歴史」の項では掲載史料の一部を取り上げて図版・読み下し・現代語

訳・解説を付し、読者に対して史料の読み解き方を丁寧に説明しており、近世史料に興味を持つきっかけとしての役割も意識された内容となっている。近世の府中市域、あるいは多摩地域を考えるにあたって、本書に先だって刊行された『新 府中市史研究 武蔵府中を考える』（主に第一号で近世史料が扱われている）とあわせて一読をすすめるとともに、今後刊行が予定されている資料編下巻・通史編の登場が俟たれる。

（小林優里）

村上弥生著

『明治の和紙を変えた技術と人々』

——高知県・吉井源太の活動と交流——

南の風社 二〇二〇・一一刊
A5 一八〇頁 一九八〇円

近年、中近世の古文書料紙に関する研究が盛んになり、歴史研究者にあっても和紙の製造技術への関心が高まっている。その際留意しなければならないのは、現在伝わ

る技術は明治期に洋紙との競合のなかで「改良」を経たものであり、和紙という言葉も洋紙との対比で初めて用いられたという事実である。そして、この技術改良を主導した人物こそ、高知県伊野の人、吉井源太（一八二六—一九〇八）であった。その足跡をたどることは、明治期の産業技術史にとどまらず、遡って前近代の製紙技術を探るうえでも重要な意味を持つ。

吉井の名自体は、二〇一六年の奈良国立博物館における特別陳列「和紙—近代和紙の誕生—」を契機のひとつとして日本史研究者に広く知られるに至ったが、その事蹟を知るには適当な書籍がないという状況が続いていた。同人の著書『日本製紙論』（一八八八年）を別として、経歴や活動については、北岡煥郎『吉井源太翁小伝』（一九三九年）、渡辺茂雄『吉井源太—土佐紙業の恩人—』（一九八六年）という簡略な小冊子しか拠るべきものがなかったのである。

いの町紙の博物館は、吉井の生家のすぐ近くに位置し、日記や紙見本・道具など、同人が残した資料をまとめて収蔵している。これらを活かし、二〇〇七年には没後百年

記念展が開催されたが、図録は作成されなかった。ただし、同展を監修した村上弥生氏は、その翌年、高知新聞に「吉井源太と明治」と題して三五回におよぶ連載を行った。地方紙での連載という周知されにくい形態ながら、貴重な成果であった。本書はこの連載に大幅な補訂を加えて一書としたものである。すなわち、吉井自身の日記も用いて事蹟を明らかにしており、同人について知るために参照すべき希望の一冊が出現したといえる。

以下、本書の概要を簡単にまとめておく。吉井は、土佐藩において藩主や将軍家に献上するための紙を抄造した御用紙漉の家に生まれた。明治維新前から質桁や澆贅などの用具の改良を行い、生産量や紙質の向上を果たし、維新後は中央官庁や県庁と連絡をとりながら新技術の導入や開発をすすめる、和紙の新たな用途を探り、海外にも販路を広げた。県内の生産者の組織化をはかる一方、国内各地から招聘されて技術改良の指導にもあたった。七二歳の時、仕事の集大成ともいえる製紙技法の解説書「日本製紙論」を著した。同書は二千部が刷ら

れ、二年以内には完売したという。

吉井とその関係者による技術指導は、愛媛・鳥取・島根・新潟などで大きな成績を上げた。和紙研究の古典でもある寿岳文章・静子「紙漉村旅日記」(一九四五年)は、在来の非効率な技術を駆逐した「土佐の影響」を否定的に捉えたが、生業の存続という観点からは評価が異なる。明治期を通じて、和紙の生産額が上昇し、常に洋紙のそれを上回っていたことは知られてよい。

また、吉井が積極的に関つて新たな用途を得た紙として、「コッビー紙」を取り上げる。極薄の雁皮紙または雁斐・三極の混合紙で、ジェームズ・ワットが考案したコビープレスと呼ばれる複写機に適合したことで称されたものである。極薄の楮紙である典具帖紙とともにタイプライターにも用いられ、欧米に輸出された。新技術に応じた和紙の発展への貢献が知られる。

和紙の製造技術に関心のある方には、本書の一説はもちろん、あわせて清流仁淀川のはとろ、いの町紙の博物館を訪れることをお勧めしたい。

(末柄豊)

真道洋子著 榊屋友子監修
『イスラーム・ガラス』

名古屋大学出版会 二〇二〇・九刊
A5 四九六頁 七九二〇円

ガラスという素材やそれを加工してできた製品は、人々の日々の多様な需要に応じて製造され、流通し、使用された物質である。著者真道洋子氏は、「イスラーム・ガラス」と題した本書において、この物質を、七世紀に始まるイスラーム化以降の中東を中心とする地域で生活する人々の文化の歴史を描く為の礎とする。

本書は序章に続く三部の本編(全十四章)、そして終章から成る。序章においてまず、ガラス製品一般の主な器形と機能、成形技法、裝飾技法等が示されることで、読者は、考察対象に対する具体的なイメージを有した状態で本書を読み進めることが可能となる。

第一部は、真道氏自らが発掘に携わり観察した、来歴が確実な大量のガラス製品資料(主にフスタート遺跡及びラーヤ遺跡出土品)の基礎的データを提示しつつ、氏が長

年自らのフィールドとしたエジプトにおける、ガラスの史的展開を七世紀から十八世紀末に至るまで時系列順に追う。物質文化の研究者であれば誰もが首肯するに違いないが、工芸品そのものの観察のみによって、それを生み出した人々の暮らしした社会を復元することは決して容易ではない。また、文字史料に残る工芸品そのもの、乃至その製造や使用に関わった人々に関する情報は極めて断片的であり、限定的である。こうした研究上の困難を、氏は考古学、分析化学、美術史学、文献史学のアプローチを相補的に組み合わせる柔軟な姿勢によつて克服せんとしている。中でも、十一—十三世紀のゲニザ文書の記述を参照し、ガラス製品を取り巻く人々の日常を鮮明に描き出す第三章は、白眉である。

本書の地理的射程は、中東以外の地域にも及ぶ。二〇—一〇年代以降の氏の研究関心を反映した第二部では、七世紀以降の中東で製造され、ヨーロッパ、東・西アフリカ沿岸部、東南アジア、東アジアにおいて流通し、使用されたガラス製品(第十一章)に加え、ムスリム君主治世下のマグリブ地

方およびアンダルス地方(第九章)並びに中央アジア(第十章)において製造され、流通し、使用された様々なタイプのガラス製品について記述がなされる。いずれの章でも最新の発掘成果が反映されており、具体的な出土地への言及を含んだ解説がなされる。

第三部において氏は、ガラス製品の用途や装飾意匠の考察によつて、ガラス製品の背景に潜む社会や文化の復元を試みる。特筆すべきは、氏が、出土遺物の用途を十把一絡げに断定することなく、慎重な判断を心がけている点である。例えば氏は、「シナイ半島のトゥール・キラーニー遺跡出土の練り込み模様入り洋梨型ガラス製容器に関しては、銅製のアイ・スティックと内容物を伴つて出土しているが故、クフル顔料を入れる為の容器であることは疑いの余地がないが、フスタート遺跡出土の同様の装飾が施されたガラス製容器に関しては、単体での出土故、用途の推定が困難である」ことを指摘する(三〇—三三頁)。このような賢明な遺物の解釈に加え、基礎的データの提示、最新の研究成果の反映と

いった要素が、「イスラーム・ガラス」を体系的に論じた初めての和書である本書の参照価値を一層高めている。(神田惟)

ユーリー・コスタヤシヨフ著
橋本伸也・立石洋子訳

『創造された「故郷」』

——ケーニヒスベルクからカリニンングラードへ——

岩波書店 二〇一九・二刊
四六 二九四頁 三九六〇円

第二次世界大戦後、旧ドイツ領東プロイセンはソ連に編入され、カリニンングラードとなった。本書はオーラルヒストリーとアーカイヴ史料を活用して、この地がロシアにとつての「故郷」とされていく過程を追つたものである。副題が「ケーニヒスベルクからカリニンングラードへ」となっているが、ここでいうカリニンングラードは市だけでなく州も指しているのだ。「東プロイセンからカリニンングラード州へ」のほが内容により合致してはいるだろう。

第一部ではドイツ騎士団の入植から第二次世界大戦前夜に至る「ケーニヒスベルクの時代」が扱われる。露独関係において、東プロイセンは経済的・社会的・文化的な架け橋であった。

第二部「カリーニングラード州の成立」

では編入直後を対象に、現地に残されたドイツ人やロシア人移住者の姿、さらに共産党幹部の苦悩が明らかにされる。一九四七年に同地に赴任した党幹部イヴァノーフが目にしたのは、戦争の後片付けすらできていない惨状であった。あらゆる働きかけも駐留軍人や党组织の腐敗のために徒勞となった。彼はモスクワを頼るも、逆に更迭され、総括会議を前に自殺した。代わって着任したシチュエルバコフが同地の「復興」を目指したが、東プロイセンの再生を唱えているように聞こえたため「復興」は「建設」の語に置き換えられた。現地に主導権はなかった。住民に目を向けると、同地のドイツ人はロシア人にとって脅威であると宣伝されていたが、実際はロシア人がドイツ人を攻撃していた。とはいえ多くのロシア人は、よく働くドイツ人に共感を

もって接しており、徐々に敵意を和らげていった。

第三部「スターリニズム末期のカリーニングラード」では、都市と農村の日常生活、ドイツ人の強制移住が描かれる。新天地に希望を抱きソ連中から移住者がやってきたが、都市で彼らは住宅と食糧をめぐる困難に直面した。ドイツ人の技術で肥沃だったはずの農村でも移住者はこれをダメにした上、コルホーズの資材不足と怠惰が生産性の低迷を助長した。移住者は生き抜くため、次第に私的経営と信仰へ向かっていった。本書の白眉の第一〇章「戦後スターリン期における「プロイセン的精神の追放」のための闘い」では、ファシスト的なプロイセンの廃墟の上に、社会主義的政治・経済・文化を備えた新しい州の「建設」が目指されたことが跡付けられる。「復興」など言語道断であった。地名の改称や記念碑の建立によって、ケーニヒスベルクにはカリーニングラードが上書きされたのである。

第四部と結語では、ポスト・スターリン期から現代にかけて、上書きして消そうとした東プロイセンの歴史やその遺産と向き

合っていく過程が追われる。ケーニヒスベルク城は保存が叫ばれたが、コスイギンによつて爆破・撤去が決定された。しかし、カント哲学への関心を契機としてケーニヒスベルクの歴史が見直され、「ファシズム犯罪の暴露」という形で東プロイセンの過去も語られるようになった。ベレストロイカ以降、欧州諸国との交流が活発化し、大聖堂が再興され、戦前の歴史への禁令も解かれた。

カリーニングラード史を正面から扱った書籍はこれまでほとんどなかった。本書には様々な利用可能性がある。著者や訳者は「二国間関係における未解決の問題」解消の一助になることを示唆している。そのほかにもドイツ史研究にとっては、ドイツ人「追放」研究などに資するだろう。ソ連史研究にとつては、一九四〇年代に編入された他の地域（バルト諸国やモルドヴァ、ザカルパチア、南樺太など）における「建設」や集団化の過程などを本書と比較することができよう。

(久保田俊樹)